

グラン＝ギニョル劇における異境のイメージ ー ロルド、モレル『究極の拷問』における中国像 ー

外国語学部 真 野 倫 平

はじめに

20世紀初頭に成立した恐怖演劇であるグラン＝ギニョル劇は、主要な観客であるブルジョワ階級が抱いていた不安を想像力の源泉としていた¹。すなわち、そこで恐怖の対象とされたのは幽霊や吸血鬼といった架空の存在ではなく、下層階級・流れ者・犯罪者・精神病患者・伝染病といった現実的存在であった。それはいわばブルジョワ階級の秩序と安全を脅かす危険な「他者」を意味していた。

グラン＝ギニョル劇が成立したのは、ヨーロッパ列強がアジアやアフリカで植民地競争を展開していた帝国主義の時代である。19世紀には植民地拡大にともないさまざまな地域や民族についての知識がヨーロッパに大量に流入した。19世紀後半に成立した万国博覧会は、植民地の物資を資本主義社会の消費システムに組み入れると同時に、ヨーロッパの支配的地位を視覚化するための装置にほかならなかった。そこでは植民地の民族や文化の異様さや珍奇さが強調され、ヨーロッパの文化的・物質的優位が強調される仕組みになっていた。

そのような時代背景の中で、20世紀初頭にはグラン＝ギニョル劇においてもアフリカやアジアを舞台にした一連の作品が作られた²。そこには野蛮な異民族や奇怪な風習、苛酷な気候や危険な風土病が恐怖の対象としてしばしば登場した。本論においては特に中国を舞台にしたいくつかの作品を取り上げ、そこに描かれた異境のイメージを分析する。さらに、同時代の中国に関する書物やジャーナリズムの報道についても検討する。以上の作業を通じて、当時のヨーロッパ人が中国についていかなるイメージを抱いていたのか、そしてそのイメージがこのジャンルにどのように反映されているのかを明らかにしたい。

1 グラン＝ギニョル劇の特徴については真野倫平編・訳『グラン＝ギニョル傑作選』水声社、2010年の解説を参照。

2 アジアを舞台とした作品には、本論で扱うロルド、モレル『究極の拷問』（1904）、ガラシ『血まみれのヒバリ』（1911）、シェーヌ『責苦の園』（1922）の他に、インドを舞台にしたルノルマン、ダグリュザン『大いなる死』（1909）、ベトナムを舞台にしたベルトン『麻薬』（1930）などがある。アフリカを舞台とした作品にはサヴォワール、マルシャン『死を前にして』（1920）、ロルド、ポーシュ『死の支配者』（1930刊）、ロルド、ポーシュ『黒魔術』（1936刊）などがある。

1 ロルド、モレル『究極の拷問』

アンドレ・ド・ロルド、ウジェーヌ・モレル『究極の拷問』（全一幕）は1904年12月2日にグラン＝ギニョル座で初演された。梗概を以下に記す。義和団の乱が起き、北京のフランス領事館は32日前から叛徒によって包囲されている。領事たちは叛徒の攻撃に耐えながら援軍の到着を待っている。領事のデムランは極限状況の中で娘のドニーズを気遣う。援軍を呼びに行った兵士の一人が、拷問を受けて瀕死となった状態で発見される。兵士は仲間が叛徒に拷問され殺された様子を報告し、絶対に生きたまま捕まってはならないと警告して息絶える。ついに叛徒が侵入し、絶望した領事は娘を自分の手で射殺するが、到着したのは実は救出にきた援軍であった。

この作品は19世紀末に中国で起きた義和団の乱を背景にしている。1894-95年に日本が日清戦争で清を破ると、列強は中国への進出をさらに進め、本格的な分割支配に乗り出した。これに対して中国人のあいだで排外運動が高まりをみせ、19世紀末には山東省で義和団による反キリスト教運動が起こった。1900年に義和団は「扶清滅洋」をスローガンに北京に進出し、6月に日本公使館書記とドイツ公使を殺害した。この機に西太后が義和団を支持し列強に宣戦布告すると、北京の外国公使たちは叛徒に囲まれ孤立した。列強諸国による連合軍は彼らを解放すべく北京に進軍し、8月に北京を攻略した。ここに至って義和団は清朝により反乱軍と認定され、まもなく連合軍により鎮圧された。籠城は国外退去命令が出された6月19日から連合軍が攻撃を開始した8月14日までの約2カ月間続いた³。

『究極の拷問』の舞台は領事館の内部であり、そこに叛徒は一人も姿を見せない。ただ遠くから彼らの怒号が響いてくるだけである。叛徒の残忍さは登場人物の口を通して語られる。とりわけ凄惨なのは、両手を切断された兵士の口から、叛徒が行った凄まじい拷問の数々が語られる場面である。

ボルナン おれの目にはあの光景が永遠に焼きついている。いいかい、おれは見たんだ、ラザリスト修道院の女を。やつらはその女を捕まえて、しっかりと縛りつけた。そして爪をはぎ取った、両足と、両手から……。それから——おお、あの叫び声！ ——真っ赤に焼けたやっここで、やつらは女の舌を引き抜き、乳房をむしり取った……。 (あえぐ) ああ！⁴ (114)

3 この事件はニコラス・レイ監督の『北京の五十五日』（1963）として映画化されている。

4 André de Lorde et Eugène Morel, *La dernière torture* in *Le Grand Guignol. Le théâtre des peurs de la Belle Epoque*, édition établie par Agnès Pierron, Robert Laffont, « Bouquins », 1995.
本作については引用に続けてページ数を記す。

本作においては、獣の群れのように荒れ狂う叛徒たちと、規律と知性をもったフランス人が明確な対照をなしている。叛徒たちは不可解な迷信を信じている。「夜のあいだは攻撃されない。義和団の連中は亡霊を恐れているのさ」(105)。彼らの怒りは凄まじいが、規律と知性を欠くためにその攻撃は効果的でない。

デムラン 私は……われわれ7人でもうひと月もやつらを食い止めている。何百人もが胸をはだけてわれわれの銃弾の前に飛び込んでくる。自分は不死身だと信じこんで。でもどんなに怒り狂ってもわれわれには勝てない、われわれ7人には！ なぜならわれわれは一致団結し、規律をもっていて、やつらはわれわれの人数を知らないからだ。われわれには勇氣以上に大きな力があるからだ。ここを出たらわれわれはたった7人の人間にすぎない。ところが相手は怒り狂った何千もの群集なんだ！ (111)

2 19世紀のヨーロッパにおける中国像

『究極の拷問』が初演された1904年には、フランス人にとって義和団の乱はまだ記憶に新しい事件であった。それでは当時のフランス人はこの事件に対して、そして中国に対していかなるイメージを抱いていたのだろうか。少し時代をさかのぼり、19世紀におけるヨーロッパ列強の清(1616-1912)への進出をたどってみよう。イギリスは中国への輸出拡大をめざし、1792年のマカートニー使節団以降たびたび使節団を派遣したが事態に進展はなかった。そこでイギリスはアヘンを中国に輸出することで貿易赤字を解消しようとした。清がアヘンの禁輸に力を入れると、イギリスは1840年にアヘン戦争を起こして勝利し、不平等条約である南京条約(1842)を結んだ。すると他国も清に対して同様の待遇を要求し、フランスは黄埔条約(1844)を、アメリカは望厦条約(1844)を、ロシアはアイグン条約(1858)を清と締結した。列強は中国での覇権を争い、イギリスは1857年にアロー戦争を、ロシアは1871年に新疆派兵を、フランスは1884-85年に清仏戦争を行った。1894-95年の日清戦争で日本が清を破ると、列強はさらに勢力分割を加速させた。こうして国力が衰退した清は辛亥革命によって1912年に滅亡した。

列強の中国進出にともない、19世紀のヨーロッパでは中国に関する知識が多量に流通するようになった。イギリスの使節団に参加したストーントン、バロー、J・F・デイヴィスらの報告によって中国の歴史や社会の現状が伝えられた。彼らの著作はすぐに各国語に翻訳されヨーロッパ諸国に広がった。イギリスでは1806年に東インド

学院が、フランスでは1795年に国立東洋語学校が設立された。1814年にはコレージュ・ド・フランスに「中国および満州の言語および文学の講座」が開設され、中国学が制度的に確立された。こうして19世紀前半には中国についてかつてないほどに具体的なイメージが形成された。それはすなわち、大野英二郎が『停滞の帝国』（2011）で述べるような、時代の流れに取り残された巨大帝国としての中国像であった。

全体としてみれば、19世紀前半、ヨーロッパにもたらされた中国に関する報告や観察は前世紀後半に比べて量が飛躍的に増大し、カトリック宣教師に代わって、イギリス人やプロテスタント宣教師が送り手の中心となり、世俗化の傾向も目立った。それらの内容はほとんどが、前世紀中葉からヨーロッパで形成された批判的な中国像、進歩を奪われた帝国というイメージを、さながら現地で確認し、再生し、反復するかのようであった。しかもそこには、一層強く明確な否定的感情が込められていた。すなわち中国に対する敵意であり、嘲弄であり、軽蔑である。これに対して、同時代に成立する中国学は世論へ影響を及ぼすには至らない⁵。

マカートニーが皇帝の臣下としての三跪九拝の礼を求められて拒絶したという有名なエピソードは、時代遅れで偏狭な中国のイメージを作るのに少なからず貢献した。それはかつて高度な文化を築きながら、過去の儀礼や権威に固執するあまり進歩に取り残された「停滞の帝国」として理解された。このような中国像は、文明とキリスト教の普及を掲げて中国での覇権を拡大しようとする列強の植民地主義政策にとっても都合のよいものであった。

例としてジョン・フランシス・デイヴィス（1795-1890）の『中国人、中国帝国および住人についての総論』（1836、仏訳1837）を取り上げよう。J・F・デイヴィスはイギリスの外交官、中国学者であり、1816年のアマースト使節団、1834年のネイピア使節団に参加した。彼は『中国人』は中国の社会と文化を否定的に紹介したもので、イギリスのみならずヨーロッパに大きな影響を与えた⁶。デイヴィスにとって中国は何よりもまず父権的体制の国である。とはいえその権威は硬直し、行政は過度に儀礼的なものに陥っている。「このシステムは小さな規模においては氏族の結合と繁栄に貢献する。しかし中国の例が示すように、最高権威が代表団のつながりによって行使されざるをえないような広大な帝国においては、このシステムは純粋なフィクション

5 大野英二郎『停滞の帝国 近代西洋における中国像の変遷』国書刊行会、2011年、380頁。

6 前掲書、46頁。

に墮落し、専制を補強し長引かせるのに役立つばかりである⁷」。

また、19世紀のヨーロッパでは植民地からさまざまな民族の情報が流入したことにより、人種理論が発達を見せた。ブルーメンバッハ（1752-1840）やキュヴィエ（1769-1832）は人種分類の基礎を築き、ゴビノー（1816-82）は『諸人種の不平等に関する試論』（1853-55）においてアーリア人を上位に置くヒエラルキーを唱えた。19世紀後半にはダーウィニズムの影響もあり、人為的な人種改良を唱える優生学的な思想も誕生した。これらの人種論は一般に白人優位のヒエラルキーを自明の前提とし、ヨーロッパ文明の優位を主張するものであった。

つまり人類の起源が一樣でなく、多数の種ないし人種が存在するならば、優良人種と劣悪人種なるものについて相互の関係を顧慮する必要がなく、区分がより容易かつ明瞭になる。そして楽観主義的な場合は、優良人種が劣等人種を支配、善導すべきとして、ヨーロッパによる植民地支配や帝国主義進出を合理化する思考と結びつき、悲観主義的な場合は、劣等人種の増加ないしは台頭によって優秀人種に存亡の危機が訪れるとして、劣等人種の排除あるいは優等人種の確保を求めていく。19世紀後半にきわめて広範な影響を及ぼすダーウィンの所論もその流れからはずれるものではないであろう⁸。

中国人のイメージもこのような人種理論の影響を受けずにはすまなかった。J・F・デイヴィスもまた中国人の人種的特徴に言及している。「中国人の頭蓋骨をヨーロッパ人や黒人の頭蓋骨と比較すると、中国人の『顔面角』が他の二者の間であることが分かる。つまり言い換えれば、中国人の額とあごはヨーロッパ人よりずっと大きく後方に傾斜しているが、アフリカ人ほどではない⁹」。「顔面角」とは18世紀にペトルス・カンパー（1722-89）が考案した頭蓋骨の形態を表す数値であり、人種間の進化の度合いを示す指標として長いこと用いられた。

7 J. F. Davis, *La Chine ou description générale des mœurs et des coutumes, du gouvernement, des lois, des religions, des sciences, de la littérature, des productions naturelles, des arts, des manufactures et du commerce de l'empire chinois*, ouvrage traduit de l'anglais par A. Pichard, revu et augmenté d'un appendice par Bazin Ainé, Paris, Paulin, 1837, 2 vol., t. I, p. 197.

8 大野英二郎、前掲書、444頁。

9 J. F. Davis, *op. cit.*, t. I, p. 251.

3 黄禍論の台頭

19世紀末になると、列強のアジア進出や日本の台頭にともない、黄色人種を白色人種にとっての脅威と見なす黄禍論が登場した。ヨーロッパでは5世紀のフン族の侵入や13世紀のモンゴル帝国の侵入の記憶もあり、東方民族を脅威と見なす思想は潜在的に存在していた。しかし1900年の義和団の乱は黄色人種に対する警戒心を呼び覚まし、それはさらに1905年の日露戦争によって決定的なものになった。フランソワ・パヴェは『19世紀末の黄禍論』（2013）において、黄禍論台頭の背景をこう説明する。

ヨーロッパの領土拡張主義は[……]中国と日本において限界に突き当たった。ヨーロッパ人は軍事的勝利を収めたにもかかわらず、極東とりわけ中国においてある事実をかいま見た。すなわち、力によってすべての大陸を支配することは実現不可能であるという事実を。中華帝国においては、ヨーロッパと作戦現場の距離はあまりに大きく、領土はあまりに広大で、住民は均一な性格で人口があまりに多いので、軍事的征服は不可能であり、祖国を離れた西洋人たちは排外運動にさらされた。それでも西洋列強は中国に軍事的攻撃を繰り返すことで、いわば白禍の被害を与えていた。

ヨーロッパでは一部の思想家が、わが身を鏡に映すことで、自分たちが策謀で正当化している軍事的黄禍がどのようなものかを感じとった。1905年の日本のロシアに対する勝利を最初の警告と見なす者もいた。フランスの大衆文学はこの問題をとらえ、中国＝日本軍がヨーロッパに侵入する軍事的黄禍の脅威を言いふらした¹⁰。

黄禍論は極東諸国の現実的な脅威が生み出したものというよりは、植民地政策において障害に突き当たった西欧人の不安と焦燥の産物であった。そこにはヨーロッパ人のアジア人に対する優越感と、意外な抵抗に出会ったことによる屈辱感が同時に認められる。とはいえ現実にはヨーロッパ人こそ中国に多大なる被害を与えていたのであり、たとえば義和団の乱において義和団に対する連合軍の報復は義和団の暴力以上に凄惨なものであった。そこでは黄禍論はむしろ「白禍という現実を覆い隠す¹¹」役割を果たしていた。

10 François Pavé, *Le péril jaune à la fin du XIX^e siècle. Fantasma ou réalité*, L'Harmattan, 2013, p. 20.

11 *Ibid.*, p. 50.

義和団の乱の直後、エドモン・テリーは『黄禍』（1901）と題された著書を刊行し、中国が日本のように急速な経済成長を遂げればヨーロッパにとって大きな脅威になるだろうと予言した。「ヨーロッパを脅かす《黄禍》は次のように定義できる。『現在のヨーロッパの産業大国の社会体制が立脚する国際経済の均衡が急激に崩れること。その崩壊は、新しい巨大国が突然に際限のない異常な競争をもたらすことによって引き起こされる¹²⁾』」。とはいえ著者の唱えるのはあくまで経済的脅威であり、また本書が引き起こした反響も限られたものであった。

黄禍論が軍事的脅威として広範な不安を呼び起こすのは、1904-05年の日露戦争における日本の勝利によってである¹³⁾。朝鮮半島における日露対立から起こったこの戦争は、1904年2月の旅順口攻撃に始まり、その後朝鮮半島の各地で戦闘が行われた。とりわけ旅順要塞の攻囲戦は熾烈を極めたが、1905年1月に要塞は陥落した。5月には日本海海戦において日本艦隊がバルチック艦隊を撃滅した。血の日曜日事件など国内問題を抱えていたロシアは和平に向けて動き出し、9月のポーツマス条約で終戦が成立した。この戦争は黄色人国家の白人国家に対する最初の勝利であり、欧米諸国の極東に対するイメージを根底から覆すものであった。

1905年3月15日の『ジュ・セ・トゥ¹⁴⁾』には「黄禍」と題された匿名記事が掲載された。そこでは日本が、そして将来的には中国がヨーロッパにとっての強大な敵になるであろうと指摘される。「恐らくわれわれにはヨーロッパ侵入という考えは早すぎるように見えるだろう。しかし中国の群衆が用途なき力であることを忘れてはならない。もし日本が彼らを連携させ、指揮して動かすならば、彼らはすぐにヨーロッパ侵入に成功しないまでも、ヨーロッパ人をアジアから追い払うことだろう¹⁵⁾」。そして中国軍がドイツ皇帝とロシア皇帝を罪人のように引き回しながらシャンゼリゼ通りを行進する様子がイラストで示されている¹⁶⁾（図版1）。

黄禍論は同時代の大衆文学にも大きな影響を与えた¹⁷⁾。アンリ・ド・ヌサーヌは『2000

12 Edmond Théry, *Le Péril jaune*, troisième édition, Paris, F. Juven, 1901, p. 309.

13 François Pavé, *op. cit.*, p. 105.

14 アルセーヌ・ルパン・シリーズが掲載されたこの大衆雑誌には、グラン＝ギニョル劇もしばしば掲載された。

15 *Je sais tout*, No. 2, 15 mars 1905, p. 136.

16 当時のメディアにおいては日本がアジア全体の指導者となる可能性がしばしば議論された。「一部の考えでは、中国人に進むべき方向を示すだけで十分であり、その役には日本が適任であった。すでに見たように、1895年にすでにユリッス・ルリッシュが中日同盟をめざしていた。彼によれば、中国人はミカドを中国と日本の皇帝に戴くのである」（François Pavé, *op. cit.*, p. 88）。

17 François Pavé, *op. cit.*, p. 91-92.

年の中国とヨーロッパ』(1900)において、未来の中国の繁栄を描いた。また、ダンリー大尉は『黄色の侵入』(1905)において、日露戦争の後に黄色人種の軍隊がヨーロッパを蹂躪する様子を描いた。ダンリー大尉は本名をエミール・ドリアン(1855-1916)といい、近未来における架空戦記小説を発表した。『黄色の侵入』では日本人の将軍が中国皇帝を担ぎ上げて黄色人種軍を結成し、ヨーロッパに侵入する。皇帝はパリに到達するが、婚約者(日本人将軍の娘)が自殺したために理性を失い、乱行に及んだすえに暗殺される。指揮官による統率を失った黄色軍はヨーロッパで暴虐のかぎり尽くし、白人文明は壊滅する。



図版1

黄色軍は勝利のさなかに突然君主も指揮官もいない状態に陥った。

日本の将軍の誰一人として自分を指揮官と認めさせるだけの権威をもっていなかった。

遠方から来た軍隊に規律を与えるだけの危機感ももはやなかった。

軍隊はもはや楽しむしかなかった。

こうして虐殺と略奪の時代が始まった。世界がいまだかつて見たことがないような、破壊と狂気の血塗られた時代が。それが残された白人文明にとどめを刺した¹⁸。

イギリスのサックス・ローマー(1883-1959)は義和団の乱に靈感を受け、『怪人フー・マンチュー』(1913)を刊行した。フー・マンチューは黄色人種による世界支配を狙う犯罪組織の首領であり、高い知能と恐るべき残忍さを備えている。「ある人物を想像してみてください——長身で、痩せていて、いかり肩で、シェイクスピアのような額で、

18 Capitaine Danrit, *L'invasion jaune*, édition illustrée par G. Dutriac, Paris, Ernest Flammarion, sans date, p. 840.

悪魔のような顔をしている。きれいに剃りあげた頭、猫を思わせる緑色の瞳、磁力のように視線を引きつける切れ長の目。東洋人の狡猾さと英知を一身に集めた、偉大なる頭脳。天才なみの知性、過去および現在の科学知識、豊かな政府の資力を備えている——もっともかの政府は彼の存在そのものをいっさい否定しているが。ともかく、これが黄色い悪魔の化身ともいうべき、フー・マンチュー博士の実像なのだ¹⁹」。フー・マンチューはやがて長編 13 本を含む人気シリーズに発展し、さらに世界各国で何度も映画化され、黄禍を象徴する代表的なアイコンとなった。

4 グラン＝ギニョル劇における中国

20 世紀初頭に誕生したグラン＝ギニョル劇もまた、このような黄禍論の影響を受けずにはすまなかった。『究極の拷問』が初演された 1904 年 12 月 2 日は日露戦争における旅順攻略の最中であり、日本の軍事的台頭がヨーロッパの新聞を騒がせていた。本作はそのような時事的関心に応えるべく作られたと推測できる。

中国が舞台になったグラン＝ギニョル劇をさらに二篇取り上げよう。シャルル・ガラン『血まみれのヒバリ』（全二幕）は 1911 年 12 月にグラン＝ギニョル座で初演された。中国では同年 10 月に辛亥革命が始まっており、まさに清朝の末期に当たる。(1) 宝石商人のリーは稀に見る美声のヒバリを育てており、隣人のチャンはそのことに嫉妬している。リーが商用の旅に出ると、チャンはリーの妻を巧みにそそのかし、鳥かごを開けさせて鳥を逃がす。(2) 帰宅したリーはチャンを呼び出すと、カーテンの陰の鳥かごを指し、大切な鳥が盗まれたと打ち明ける。リーはさらに、妻を拷問して真相を聞き出したので自分の手で犯人に復讐するつもりだと告げる。リーはさらに妻の両親を証人に呼び出すと、その目の前でチャンに犯行を自白させ殺害する。娘の安否を気遣う両親に対し、リーは鳥かごに入った妻の生首を見せ、愚かな妻に自ら罰を与えたと言い放つ。

主人公のリーはヒバリをこよなく可愛がる愛鳥家であり、鳥の飼育に関しては西洋人には想像もつかない洗練された技術をもつ。「ああ、あの可愛い鳥たちを育てるのは何という楽しみだろう。西洋人というのは本当に軽蔑すべき野蛮人だ。やつらはカンムリヒバリを育てるすべを知らないのだから²⁰」(469)。彼は教養豊かな文化人で

19 サックス・ローマー『怪人フー・マンチュー』嵯峨静江訳、ハヤカワ・ポケット・ミステリ、2004 年、22 頁。

20 Charles Garin, *L'alouette sanglante ou Hioung-Pe-Ling in Le Grand Guignol. Le théâtre des peurs de la Belle Epoque*, Robert Laffont, « Bouquins », 1995. 本作については引用に続けてページ数を記す。

あり、会話にしばしば自分や他人の詩をちりばめる。とはいえその銜学趣味はやや滑稽であり、会話は堅苦しい儀礼に満ちている。

リー 私などあなたの前では年端もいかぬ若輩者にすぎません。

チャン あなたのような年長者に親しくしていただき身に余る光栄です。

リー（休憩用寝台を示し） 上座にお座りください。

チャン 下座にいたしましょう。それではあまりにも恐れ多いので。

リー とんでもございません。(471-472)

チャンは祖先をかぎりなく敬い、家名を何よりも重んじる。その一方で妻や姑に対しては高圧的な態度をとり、使用人を家畜のように扱う。妻のことはまるで後継ぎを産むための道具としか見なしていない。

リー ご先祖様のことを思うと、もはや第二の妻を迎えざるをえない。

リー夫人 なすべきことは分かっております。時が来れば、私自らあなたの息子を産むべき女性をこの家に迎え入れましょう。

リー そうなれば私の幸福も完璧というものだ。(469)

J・F・デイヴィス『中国人』によれば、父権制が強い中国社会では年長者に大きな敬意が払われる。「中国人が誰かを尊敬をもって扱うとき、彼らはその人を《ラオイェ》すなわち『老人あるいは敬うべき父』と呼ぶ。これは単なる呼称なので、自分よりずっと若い者に対しても用いられる²¹⁾」。また、中国での女性の地位はきわめて低い。「中国には女性の三重の従属を表す諺がある。『結婚前は父親に従い、結婚後は夫に従い、未亡人になれば息子に従う²²⁾』。女性の役目は男子の後継者を産むことであり、男子がいない場合は夫が妾をもつことが許される。「中国で一夫多妻が普通であるというのは大きな間違いである。[…]²³⁾『法によって一夫多妻が認められているというのは正確ではない。ただ、妾が黙認されているだけである […]²⁴⁾』。妻とのあいだに息子をもつ者が（重要なのは息子だけである）妾をもつことは問題である。しかしそうでない場合は許される²⁵⁾」。最終的にリーは妻を殺害してその首をかごに入れるのだが、これは後に見るように中国で盗賊や殺人犯に対して行われた刑罰とされていた。

21 J. F. Davis, *op. cit.*, t. I, p. 247.

22 *Ibid.*, p. 263.

23 *Ibid.*, p. 264-265.

次に、1922年10月28日にグラン＝ギニョル座で上演されたピエール・シェーヌ『責苦の園』（全三幕）を取り上げよう。(1) 軍人のマルシャルはアジアに向かう船上で謎の美女クララと恋愛関係になる。彼は彼女をめぐる中国高官と争いになり、はずみで相手を殺してしまう。(2) マルシャルは軍隊を脱走し上海でクララと暮らすようになる。クララは「責苦の園」の公開処刑を無上の楽しみにしており、マルシャルはそんな彼女の残酷さに戦慄する。やがてマルシャルに殺人容疑の捜査の手が迫る。(3) 二人は責苦の園を見物した後、阿片船に阿片を吸いに行く。逮捕の不安に怯えるマルシャルに向かい、クララは自分が中国政府のスパイであると告白し、一緒に逃げようと誘う。しかし彼女はそこで反政府の秘密結社「赤い龍」に捕らえられ死の拷問を受ける。

本作はオクターヴ・ミルボーの小説『責苦の園』（1899）の翻案であるが、船上の殺人からクララの処刑に至るストーリーはほぼオリジナルである。ただし「責苦の園」の設定は原作のままであり、これはミルボーの病的な想像力の結晶である。この広大な公園では、囚人に対して想像を絶するさまざまな残酷な刑罰が行われ、囚人の身体からしたたる血によって美しい花々が咲き乱れる。それはわれわれの賛嘆と嫌悪を同時にかきたてる、天国とも地獄ともつかない異様な空間である。

戯曲版においても、中国は最高の洗練と最悪の暴力を合わせもつ特殊な国として描かれる。一方には美しい花園や阿片船における強烈な快楽があり（「そう、私は見事な庭園の中に住まいをもっている。そこではすべてが自由な生活と愛のために作られているの²⁴」（912））、他方には処刑場や疫病などの凄まじい恐怖がある（「この国ではすべてが恐ろしい。愛情も、花も、病気も、死も」（924））。このような苦痛と快楽の両義性は、責苦の園のさまざまな処刑の技術に集約される。

ハン われわれの拷問者の中に、とりわけ優れた者が一人います。本物の学者で人体解剖学を熟知しています。まるで彫刻家が粘土や大理石を扱うように、肉体を扱うのです。彼は、肉体の神秘の暗闇の奥に隠された、あらゆる苦痛の驚異を引き出すことができます。相手の神経にそっと触れるだけで、何時間も苦痛のうめきを上げさせることができます。私は彼がある男をひものようにこま切れにするのを見ましたが、この男はそれでも生きていたのです！（929）

24 André de Lorde et Pierre Chaine, *Le jardin des supplices in Le Grand Guignol. Le théâtre des peurs de la Belle Epoque*, Robert Laffont, « Bouquins », 1995. 本作については引用に続けてページ数を記す。

中国における処刑の多様性と残酷さはヨーロッパでは以前より知られていた。J・F・デイヴィスは『中国人』において、それらの多くは誤った情報に基づくものであると指摘しつつ²⁵、中国のさまざまな処刑を紹介している。とりわけ残酷なのは「リン＝チー」と呼ばれる処刑方法である²⁶。

最もよく用いられる罰の道具は竹であり、その大きさは厳密に定められている。

[…]

次にくる懲罰は「キア」あるいは首枷であり、木の首輪と呼ばれる。それは一種の移動式の晒し台であり、そこに囚人は閉じ込められ、罪状が上に書かれる。

[…]

三つの極刑は以下のものである。一、絞首刑。二、最も重い罪に対しては斬首。三、反逆、親殺し、冒涇等に対しては、「リン＝チー」と呼ばれる処刑がある。それは「緩慢で不名誉な死」であり、ヨーロッパ人はそれを不正確ではあるが「こま切れの刑」と呼ぶ。盗賊や殺人犯の首は竿に吊り下げられたかごの中に晒しものにされる²⁷。

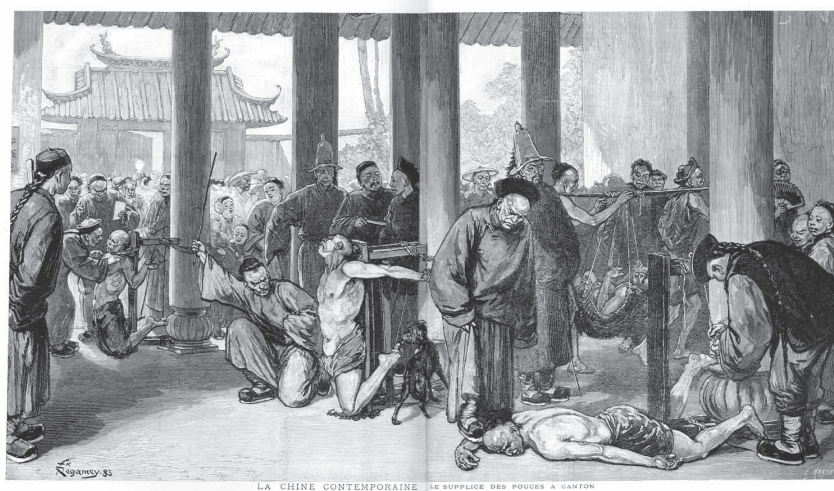
ミシェル・ドロンはミルボー『責苦の園』への序文において、当時中国の公開処刑がヨーロッパ人旅行者にとって一種の観光名所と化していたと指摘する。「中国は世論においては洗練された残忍さの国であった。生徒たちに賞として配付された本を開けば納得がいく。エルネスト・ミシェルの『中国』は『240日間世界一周』の一卷であるが、そのピトレスクな面白さで生徒たちの想像力を刺激し、植民地で働く意欲をかきたてた。監獄や公開処刑は観光プログラムの一環であった。[…]

これらの描写や阿片窟の描写は、ヨーロッパ人好みの中国の残忍さとデカダンスという想像を裏づ

25 「これらのさまざまな法に効力を与える罰については、罪人に罰を与える際の恣意性や苛酷さについてきわめて不正確な観念が広まった。広東で売られる、仏教の地獄に落ちた者たちの苦しみを描いた粗野な版画が、中国の刑罰として示されたのである」(J. F. Davis, *op. cit.*, t. I, p. 229)。

26 この刑罰についてはエドモン・テリーも『黄禍』(1901)において取り上げている。「中国の司法の特徴は、親殺しや不敬といった背信の罪に対する法の厳しさである。これらの罪で糾弾された者にはいかなる情状酌量も与えられない。有罪が確定すると、リン＝チーと呼ばれる不名誉な緩慢な死刑——ヨーロッパ人なら『こま切れの刑』とでも呼ぶべきもの——が与えられる」(Edmond Théry, *op. cit.*, p. 74)。

27 J. F. Davis, *op. cit.*, t. I, p. 230-232.



図版 2

けるものであった²⁸」。このようなセンセーショナルな中国像はメディア受けすると同時に、同時代の植民地主義政策にとって都合のよいものであり、それゆえに教育の現場にも積極的に取り入れられた。

1884年（清仏戦争の年）の『イリュストラシオン』では、エミール・ギメ²⁹が「親指の刑」を紹介している。「《広東の裁判所における親指の刑》」。前の記事では中国の法的刑罰がどのようなものか簡単に説明したが、中国帝国の拷問吏の想像力による非合法の刑罰について語ろうとすれば分厚い書が必要になるだろう。とはいえ『イリュストラシオン』の「親指の刑」の挿絵について説明しよう。この法的手段は広東で、特に海賊行為と違法賭博に対して用いられる。中国人は非常に賭博好きなのである³⁰。巨大なイラストには異様な体勢で刑罰を受ける中国の囚人たちの姿が描かれている（図版2）。

1905年10月15日の『ジュ・セ・トゥ』ではフィリップ・ベルトロ³¹が「中国の処刑」と題された記事の中でさまざまな刑罰を紹介している。記事の冒頭には、木の檻の

28 Octave Mirbeau, *Le Jardin des supplices*, édition présentée et annotée par Michel Delon, Gallimard, « folio », 1991, préface de Michel Delon, p. 15-16.

29 エミール・ギメ(1836-1918)は実業家で、東洋美術のコレクションで知られるギメ美術館の創立者。

30 *L'illustration. Histoire d'un siècle 1843-1944*, t. 5, années 1876-1884, Le livre de Paris, 1985, p. 266.

31 フィリップ・ベルトロ(1866-1934)は両大戦間の外交で活躍したフランスの外交官。芸術家・文学者との交友でも知られる。

上部から首を外に出している囚人の写真が置かれている（図版3）。「中国人は洗練された残忍な想像力で数多くの処刑を発明した。次に示す例はその中でもかなり恐ろしいものである。死刑囚は首を板のあいだに固定される。両足は石が積まれた上に乗っており、処刑人がその石を一つ一つ取り除いていく。そして首の脊椎が身体の重みで壊れるのである³²」。彼はさらに例外的なケースと断りつつ、衝撃的な処刑方法を紹介している。「そのような感受性の強い外国人の一人は、写真の乾板を現像容器から取り出して気を失いそうになった。実はそれは百裂の刑といって、死刑執行人は死刑囚の両腕と両腿の腱を順番に抜き取り、それから肩と脚の関節を切断し、まぶたと乳房を切り取るのである³³」。



図版 3

また、ダンリー大尉の『黄色の侵入』（1905）にも皇帝の閲兵式でヨーロッパ人捕虜の集団処刑が行われる場面がある。「しかしヨーロッパ人の集団処刑の噂は周囲一帯に他の何よりも大きな反響を呼んだ。中国人は本能的に残酷であり、人間の身体に最大限の苦痛を与えることにこれほど長けた民族は他にない³⁴」。広大な平原はありとあらゆる残忍かつ精妙な処刑技術の博覧会と化す。

ある者は髪や髭、眉や睫毛を一本ずつ、あるいはひと束ずつ抜かれた。他の者はまず唇とまぶたを切除された。

これらの者に対しては、まずペンチと金槌で歯が抜かれた。背と腹に焼けた鉄で縞模様がつけられた。

またある者に対してはゆっくりと関節を外すという恐るべき処置がなされた。外科医が学識と技術を振るい、流血しないよう絶えず注意しながら指骨を一つずつ外していった。

処刑人はこちらの集団からあちらの集団へと走り回り、ここでは爪をはぎ、あ

32 *Je sais tout*, No. 9, 15 octobre 1905, p. 289.

33 *Ibid.*, p. 289-290.

34 Capitaine Danrit, *op. cit.*, p. 237.

そこでは顔の皮を細く切り取り、いたるところで開いた傷口に塩や酸や唐辛子をふりかけた³⁵。

おわりに

19世紀末から20世紀初頭のフランスにおいては、黄禍論の影響を受けて、恐るべき脅威としての中国像が広く流通した。この時代に成立したグラン＝ギニョル劇にはそれらの言説の直接的な影響が認められる。もとよりこのジャンルにおいては観客の恐怖心を刺激することが第一の目的であり、歴史的な考証は二の次に置かれていた³⁶。それゆえにそこではセンセーショナルな要素がことさらに取り上げられ、快楽の洗練と苛酷な暴力がいつそう強調される結果となった。それは当時のブルジョワ階級の想像力が生み出した、強烈な魅力と凄まじい恐怖を合わせもつ特殊な空間であった。

興味深いことに、ロルドには『究極の拷問』と題された短編小説があり、戯曲とストーリーはほぼ同一であるが、舞台はロシア支配下のコーカサスに置き換えてある³⁷。すなわち、主人公モラルは石油開発の仕事で娘とともにコーカサスの支局におもむくが、現地の労働者たちの敵意に迎えられる。労働者のストライキはやがて暴動となり、彼の屋敷は暴徒に囲まれる。食料の調達に行った農夫が、残忍な拷問を受けた姿で発見される。農夫は生きたままつかまってはならないと警告して息絶える。ついに群衆が館に侵入し、絶望したモラルは娘を射殺するが、扉を破って入ってきたのは救出にきたロシアの憲兵であった。

ロルドにとって物語の舞台が中国であろうがロシアであろうが大した問題ではなく、ヨーロッパ人にとって未知なる土地であればどこでもよかったように思われる。このことは、グラン＝ギニョル劇における異境が、現実の反映というよりはヨーロッパ人の想像力の産物であることを間接的に示唆している。そう考えると、想像上の叛徒の影に怯えて娘を殺害してしまう『究極の拷問』の主人公は、想像上の恐るべきアジアに怯えるヨーロッパ人の姿を戯画的に表しているようにも見える。

35 *Ibid.*, p. 250.

36 たとえばシェヌ『責苦の園』では、主人公は軍の任務によりハノイで下船し「中国国境に派遣され」るが、その目的地が「プノンペン」という地理的に不可解な設定になっている。

37 André de Lorde, *La dernière torture dans Figures de Cire*, Paris, Eugène Figuière, 1932.

付記

本論文は2013年度南山大学パッへ研究奨励金I-A-2ならびに2013年度南山大学ヨーロッパ研究センター研究交流助成による研究成果の一部である。